

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531243

研究課題名(和文) 児童生徒の校種移行時の適応を向上させるための「テークオーバーゾーン」

研究課題名(英文) "Takeover zone program" to improve the adaptation of the students at the time of entrance to the school

研究代表者

磯邊 聡 (ISOBE, Satoshi)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：90305102

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：近年、「小1プロブレム」「中1ギャップ」「高1クライシス」などと呼ばれる、校種移行期に子どもたちが不適応を示すケースの存在が問題になっている。円滑な新生活の開始は重要な心理的課題であり、丁寧な支援が求められる。

そこで本研究では、各教育現場の現状を半構造化面接および学校視察を通じて把握し、その結果をもとに、校種移行期の不適応を軽減するためのプログラム群を、小学校・中学校・高校ごとに作成することで、児童生徒の心理的健康に寄与することをめざした。

研究成果の概要(英文)：In recent years, there are many cases of students who have difficulty adjusting to school life in the first year of a new school. This issue is known as the "SHO-ICHI- PROBLEM (1st grade problem)" and the "CHU-ICHI-GAP (7th grade gap)" and the "KO-ICHI-CRISIS (10th grade crisis)". We urgently need to deal with this problem. The start of smooth new life is an important mental issue, and careful support is demanded.

In present study, we grasped the present conditions of elementary school, junior high school, and high school through a semistructured interview and school inspection. Based on these result, we made program group to reduce maladjustment for the entrance to each school. We hope these programs contribute to the psychological health of the child.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学 生活指導・生徒指導

キーワード：中1ギャップ 小1プロブレム 高1クライシス 校種移行 不適応 教育相談 小中連携 テークオーバーゾーンプログラ

### 1. 研究開始当初の背景

近年、教育現場において、「小1プロブレム」「中1ギャップ」「高校1クライシス」等への対応が喫緊の課題となっている。これらは、それまでの環境から上級校への進学を果たした際に生じる心理的不適応であり、校種移行期に特有の問題といえる。

### 2. 研究の目的

そこで本研究では、入園・入学・進学といった新環境における児童生徒の不適応をできるだけ軽減するために、「テークオーバーゾーン期」という概念を導入し、この時期に必要な情報は何か、これらの情報はどのように得られることが望ましいのか、これらの不適応を軽減するための取り組みは何か、上記の点が校種ごとにどのような異同を持つのか、をそれぞれ明らかにする。

そして最終的に、『児童生徒の不適応を軽減するためのテークオーバーゾーンプログラム』を小学校、中学校、高校ごとに作成することを目指した。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究 1

研究 1 では、幼稚園教諭、小学校教諭、公立中学校教諭、私立中学校教諭、公立単位制高校教諭、私立単位制高校教諭、を対象とした半構造化面接を実施し、引き継ぎの実際、児童生徒の入学に際して把握しておきたい情報、校種移行期の問題に関する事項、について聞き取りを実施した。

#### (2) 研究 2

研究 2 では、海外の学校における引き継ぎの実際や現状を知るため、台湾およびタイの学校視察を行った。

#### (3) 研究 3

これまでの研究の結果を踏まえ、どのような情報が必要か、どんなプログラムが必要か、プログラム実施にあたる組織はどのようなものが適切か、どんな資料が必要か、等について、小学校・中学校・高校ごとに検討し、「テークオーバーゾーンプログラム」の内容の検討を行う。

### 4. 研究成果

研究 1 から研究 3 までの結果をまとめ、本研究の目的である『校種移行期の不適応を軽減するためのテークオーバーゾーンプログラム(小・中・高校版)』を完成させた。以下にプログラムの概要を紹介する。

#### (1) 本書の構成

A 4 版で 60 ページからなり、表紙にイラストを入れるなど親しみやすい体裁にした (Figure 1)。本書は 2 部構成となっている。第 1 部は「テークオーバーゾーンプログラムの概要」として全体像を紹介し、第 2 部は「テークオーバーゾーンプログラム」として各校種別に具体的なプログラムを示した。



Figure 1

#### (2) 第 1 部

第 1 部では次の点について記述した。

児童生徒の移行期の不適応をめぐる問題：小1プロブレム、中1ギャップ、高1クライシスなどについて触れ、本プログラムの背景にある校種移行期の適応問題の現状を紹介した。

校種移行期の不適応を軽減するためのプログラムの必要性：児童生徒が次の学校への入学が内定してから、入学後 1 ~ 2 ヶ月後までの比較短い期間をリレー競技におけるバトン受け渡しゾーンに重ね合わせ「テークオーバーゾーン期」と命名することを記した。

テークオーバーゾーン期に注目した理由：この時期に特化したプログラムのメリットを明示した。

プログラムの特徴：本プログラムは、校種移行期の不適応に関するハイリスク要因をピックアップしたこと、「前籍校 - 次籍校」間の連携と「家庭 - 学校」間の連携を重視していること、「プロジェクトチーム」を中心に実施されることが特徴であることを述べた。

校種による特徴：小学校版では児童の入学前に重きが置かれ、中学校版では生徒の入学前後を通じて比較的均等にプログラムが配置され、高校版では入学後のはたらきかけが中心になることを述べた。

テークオーバーゾーン期における情報収集・連携のすすめ方：プロジェクトチームを中心としたサイクルを形成することが大切であることを記した。

プログラムの使い方：各校種とも「把握しておきたい情報」「大まかな流れ」「テークオーバーゾーンプログラム」「具体的なプログ

ラム」という構成になっていることを述べた。

### (3) テークオーバーゾーンプログラム < 小学校版 >

第2部では各校種別に具体的なプログラムについての詳述を行った。まずはじめに小学校版について次の内容を示した。

把握しておきたい情報：小学校に入学する児童について、あらかじめ把握しておきたいハイリスク要因とその背景について、本人に起因する要因を3項目、環境に起因する要因を8項目挙げ、それぞれ考えられる背景や生じやすい現象等について示した。

大まかな流れ：プロジェクトチームの立ち上げから、入学後の継続的な見守りまでの流れをプログラム名および資料番号を示しながら図式化した。

#### テークオーバーゾーンプログラム

小学校・幼稚園および保育所、家庭それぞれがどのような流れで、何をするのかについてのタイムテーブルを示した。

具体的なプログラム：それぞれのプログラムを、時期・対象・目的・内容・手順等の項目ごとに示した。具体的なプログラムは以下の通り。

プログラム1「プロジェクトチームの立ち上げ」：プログラムの実施を統括するチームの結成のしかたおよび活動の際の留意点などについて記した。

プログラム2「入学前相談」：入学前に配慮が必要な児童についての情報を得る手段の一つとして「入学前相談」を実施する手順を示した。また、資料として保護者に配付するおたよりの例を添付した。

プログラム3「児童支援シートの活用」：就学時健診・幼保交流会・引き継ぎ会・直接観察などの場で、共通のシートを活用し児童および保護者についての記録を行うことで、貴重な情報を得ることができる。その方法および観点等を資料とともに詳述した。

プログラム4「入学式リハーサル」：さまざまな理由により入学式に不安を持つ児童が、安心して、落ち着いて式に参加できることで、学校生活をスムーズにスタートできるように、入学式リハーサルを行うための手順を資料とともに示した。

### (4) テークオーバーゾーンプログラム < 中学校版 >

中学校版では次の内容を示した。

把握しておきたい情報：中学校に入学する生徒について、あらかじめ把握しておきたいハイリスク要因とその背景について、本人に起因する要因を6項目、環境に起因する要因を9項目挙げ、それぞれ考えられる背景や生じやすい現象等について示した。

大まかな流れ：プロジェクトチームの立ち上げから、入学後の継続的な見守りまでの流れをプログラム名および資料番号を示しながら図式化した。

テークオーバーゾーンプログラム  
中学校・小学校・家庭それぞれがどのような流れで、何をするのかについてのタイムテーブルを示した。

具体的なプログラム：それぞれのプログラムを、時期・対象・目的・内容・手順等の項目ごとに示した。具体的なプログラムは以下の通り。

プログラム1「プロジェクトチームの立ち上げ」：プログラムの実施を統括するチームの結成のしかたおよび活動の際の留意点などについて記した。

プログラム2「入学前相談」：入学前に配慮が必要な生徒についての情報を得る手段の一つとして「入学前相談」を実施する手順を示した。資料として保護者に配付するおたよりの例を添付した。

プログラム3「小中引き継ぎ会・学級編成」：小中学校の担当者が一堂に会して実施される情報交換会をより効果的にするための手順を記し、資料のひな形を添付した。

プログラム4「共通理解生徒の把握」：これまで得られた資料や情報から、あらかじめ知っておいた方がよい情報や必要な配慮事項を共有するための会議の持ち方について詳述した。

プログラム5「教育相談の実施」：入学後1週間目ぐらいに全新入生を対象とした教育相談を実施することで、生徒のありようを知るとともに抱えている悩みや問題をいち早くすることができる。そのための教育相談の実施手順と留意点を資料とともに示した。

プログラム6「入学後の観察による生徒理解・共通理解」：入学後1～2ヶ月程度を経過した時点での生徒の適応状況を確認し、気になる生徒や配慮が必要な生徒、あるいはこれまで行ってきた支援の結果等を検討するための方法をチェックリストとともに示した。

### (5) テークオーバーゾーンプログラム < 高校版 >

高校版では次の内容を示した。

把握しておきたい情報：高校に入学する生徒について、あらかじめ把握しておきたいハイリスク要因とその背景について、本人に起因する要因を9項目、環境に起因する要因を5項目挙げ、それぞれ考えられる背景や生じやすい現象等について示した。

大まかな流れ：プロジェクトチームの立ち上げから、入学後の継続的な見守りまでの流れをプログラム名および資料番号を示しながら図式化した。

#### テークオーバーゾーンプログラム

高校・中学校・家庭それぞれがどのような流れで、何をするのかについてのタイムテーブルを示した。

具体的なプログラム：それぞれのプログラムを、時期・対象・目的・内容・手順等の項目ごとに示した。具体的なプログラムは以下

の通り。  
プログラム1「プロジェクトチームの立ち上げ」：プログラムの実施を統括するチームの結成のしかたおよび活動の際の留意点などについて記した。

プログラム2「入学前相談」：入学前に配慮が必要な生徒についての情報を得る手段の一つとして「入学前相談」を実施する手順を示した。資料として保護者に配付するおたよりの例を添付した。

プログラム3「新入生情報一覧表を活用した中高連携」：高校への入学にあたり、配慮すべき自校のある生徒について事前に把握するとともに、入学後の支援方法を立案する際の情報を得るための中高連携の方法について資料とともに示した。

プログラム4「新入生向け相談案内」：入学直後のオリエンテーションの時間に前新入生に対して、自校の相談システムや担当者の名前等を知ってもらい、気軽に相談できる場があることを周知する方法を資料とともに示した。

プログラム5「入学直後の面談前アンケートと個人面談」：オリエンテーション期間までを目安に全入学生にアンケートを実施し、気になる生徒に対して個人面談を実施する手順や留意点を資料とともに示した。

プログラム6「1学期中間考査のアンケートと個人面談」：1学期考査の終了後に再びアンケートを実施し、ハイリスク要因を抱えていた生徒の現状把握および、新たに気になる生徒がいないかどうかをチェックし、必要に応じて個人面談を行う手順や留意点を資料とともに示した。

#### (6)コラム

本プログラムでは校種移行期の問題をより深くそして適切に理解するためにコラムを4本掲載した。それぞれ次の通りである。楽しみにしていた入学や進学もストレスサーになりうる。

校種移行は大人への階段でもある。

「段差」は成長の試金石。

校種移行期はリセットのチャンス。

#### (6)テークオーバーゾーンプログラムの特徴

本プログラムはいくつかの点で独創性を持っている。

実施時期を限定した：教育現場の現状を考慮し、新たな負担ができるだけ生じないようにするとともに、最大の効果が得られるように「テークオーバーゾーン期」という概念を導入し、その時期に特化したプログラム群を作成した。

校種別のプログラムを作成した：本プログラムは、小学校版、中学校版、高校版の3種類からなっている。これは子どもの発達段階だけでなく校種による特性を考慮したものである。特に高校版のこのようなプログラムの存在は貴重といえる。

プロジェクトチームを中心に据えた：プログラムの実施主体としてプロジェクトチームの結成を提案した点が独創的である。これによってより柔軟なプログラム運営と支援が可能になる。

入学前相談の提案：従来、入学前にもたらされる情報は学校間での情報交換会によるものが大きかったが、広く入学前相談を実施することで、保護者が積極的に情報を学校に伝える場を作ることができ、結果としてより適切な支援体制の構築につながると考えられる。

#### (7)今後の課題

今後の課題として次の2点を指摘することができる。

プログラムのさらなる洗練：今回作成したプログラムがどのような効果を持ち、改善点は何であるのかについて事例等を収集し検討することで、さらなるブラッシュアップを図ることが求められる。

「自分を守る能力」を育てること：本プログラムはいわば環境が寄り添うことを前提としたものである。いっぽうで、児童生徒が自ら環境に働きかけるとともに、自分の心身を自分で守る能力を発達させることも今後に残された重要なテーマである。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

磯邊 聡(2014) 「いじめ問題」をどう捉えるか - 教育臨床の現場から - , 千葉大学教育学部研究紀要, 62巻, 51-58, 査読無

磯邊 聡(2013) 健康相談 - スクールカウンセラーの立場から, 学校保健研究, 54巻6号, 501 - 506, 査読有

磯邊 聡(2013) 教育臨床における発達促進的部分適応, 千葉大学教育学部研究紀要, 61巻, 51 - 57, 査読無

磯邊 聡(2012) 小柴論文へのコメント, 文教大学臨床相談研究所紀要, 16巻, 37-39, 査読無

磯邊 聡(2012) 新年度, 心理的問題を抱える子どもたちを養護教諭がいかに把握し, サポートしていくか, 『健』, 41巻, 29-33, 査読無

〔学会発表〕(計3件)

ISOBE Satoshi, ARAI Mie, ASAMI Mitsuko, HISHIKI Midori, ITOH Yasuhiro, KANETAKA Mitsuko, KOIDE Michiyo, KUROIWA Hatsumi, MAKINO Yoshie, OHMORI Chieko, OKAMOTO Kohichi, SAITOH Atsuko, TAKAHASHI Naoko, TAKETOMI Kyoko, WATANABE Yumi, YASHIRO Sachiko, YASUZUKA Ikuko(2013.8.28) Development of a Model Program to Reduce Maladaptive in Adjusting to a New School -Focused on the "Takeover Zone Term"- , 21st IUHPE World Conference on Health

Promotion(PATTAYA, THAILAND)

磯邊 聡(2013.6.23) 「自分を守る能力」  
をめぐる一考察, 第 22 回日本健康教育学会  
学術大会(千葉大学)

ISOBE Satoshi(2012.5.5) Attempt to  
Improve the Students' Adapting to Japanese  
Junior High School at Their Entrance, The  
Second Asia-Pacific Conference on Health  
Promotion and Education(Taiwan)

〔図書〕(計1件)

磯邊 聡(2013) 千葉大学教育学部附属  
教員養成開発センター(編著)『教育の最新  
事情 - 教員免許状更新講習テキスト第3版』,  
福村出版,(分担標題:13章「学校における  
被害(災)支援」, p165-177)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

磯邊 聡 (ISOBE Satoshi)  
千葉大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 90305102

### (2)研究協力者

荒井 美恵(ARAI Mie)  
千葉県立佐倉高等学校・養護教諭  
浅見 光子(ASAMI Mitsuko)  
千葉県スクールカウンセラー  
菱木 みどり(HISHIKI Midori)  
千葉県立千葉大宮高等学校・教諭  
伊藤 康弘 (ITO Yasuhiro)  
千葉県立千葉盲学校・教頭

金高 美津子 (KANETAKA Mitsuko)  
千葉県子どもと親のサポートセンター  
・研究指導主事

小出 美千代 (KOIDE Michiyo)  
市原市教育センター・指導主事

黒岩 初美 (KUROIWA Hatsumi)  
群馬県立太田工業高等学校・養護教諭

牧野 良枝 (MAKINO Yoshie)  
千葉県立君津特別支援学校・教諭

岡本 孝一 (OKAMOTO Koichi)

浦安市立美浜中学校・教諭

大木 静子 (OKI Shizuko)

八千代市立高津中学校・養護教諭

大森 千恵子 (OMORI Chieko)

柏市立手賀西小学校・教頭

齊藤 敦子 (SAITO Atsuko)

千葉県子どもと親のサポートセンター  
・指導主事

高橋 直子 (TAKAHASHI Naoko)

千葉県立沼南高等学校・養護教諭

武富 教子 (TAKETOMI Kyoko)

千葉市立院内小学校・教諭

渡辺 由美 (WATANABE Yumi)

柏市立大津ヶ丘中学校・教諭

矢代 幸子 (YASHIRO Sachiko)

千葉県立千葉南高等学校・教諭

安塚 郁子 (YASUZUKA Ikuko)

千葉市立新宿中学校・教諭